



二十世紀は戦争と革命の世紀であったが、世界戦争と社会主義革命によって世紀の覇者となった米ソ両超大国には、もはや昔日のような力はなくなってきた。過般のマル

ソ連は、東欧化するか

そうしたなかで二十世紀のシンボルであり、すくなくとも一九六〇年代半ば頃までは歴史的進歩の道標のように見做されていた社会主義は、いまや息絶え絶えになって喘いでいる。最近のポーランド、ハンガリーから東ドイツ、チエコにいたるまで一斉に爆発した自由化・民主化への欲求に見られるように、社会主義諸国はいま内部から大きく変質しようとしており、共産党の一党独裁体制が相次いで崩れつつある。

私がかねがね主張してきたところであるが、社会主義は成熟した国家から次第に崩壊しはじめ、社会主義・共産主義の呪縛から離脱することがそこでの歴史の進歩となって、これから二十一世紀にかけては、時計の針が左から右へと大きく逆回転してゆくことであろう。今回の東欧諸国の歴史的な変動は、そのことを如実に示したのであった。私自身、去る九月にはチエコと東独を訪れ、独裁的社会主義国家の最後の断面にふれたのだが、近い将来の変化が期待されていたとはいえず、かくも早くその時期が訪れようとは思わなかった。しかし、ひとたび動き出した歴史の歯車はもう反転しないであろう。なぜなら、これらの諸国は、社会主義そのものに苦しめられつつけてきたからである。

だとすれば、今日の東欧の潮流は、いずれソ連や中国に波及してゆくものと私は考えている。ゴルバチョフ書記長自身、今回の東欧情勢の流動化を促した仕掛人であるだけに、彼はたんにブレジネフ時代の「制限主権論」を行って東欧の動きを抑えなかつたのみならず、彼自身が内心では、いずれソ連も東欧の後追いをしてゆくであろうと想定しているのではないかと。私は、東欧情勢が大きく動きつつあったこの十月中旬下旬、右のような問題意識を支えられてソ連と中国を訪れた。ソ連でも中国でも東欧の動きに注目が集まっていたけれど（但し中国では東欧の動きがほとんど報じられていない）、いまやソ連が東欧化する

ソ連・中国はどこへゆく

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

とほあり得ず、また、中国当局は、天安門事件を導いた民主化運動のなかに、中国ポーランド化の危険を感じたがゆえに、これを軍事力によって徹底的に抑えつけたのである。

ゴルバチョフ体制下のソ連は、ペレストロイカとグラスノスチ（情報公開）によって、大きく変わりつつある。しかし、その変化は、皮肉にもマルクス主義の用語法とは逆に、上部構造に大きく作用しているのみで、ソ連社会の土台と下部構造はほとんど変わっていない。つまり、意見の多様化、批判の自由、そして物事の仕組みを動かさずにはすむ外交政策上の発想の転換などは大胆に進んでいるけど、ソ連社会のシステム変換や経済の活性化はまったくゼロに等しいといえよう。

だから、ソ連市民は国内で少しも短くない行列に並んでペレストロイカを見ていただけに、欧米や東欧でのようなゴルビー・ブームはソ連には存在していない。

こうしてソ連は動くことにも動けず、また東欧のような急激な変化はしようにもなし得ず、またそれは是非とも避けねばならない。ここにゴルバチョフ書記長のジレンマがあり、そうしたソ連の矛盾した半面は、あまりに早く社会主義世界全体が動いてはしれないという一点で、今日の激動に裨きしている中国への新たな親近感につながっている。

脆弱な中国新体制

中国は、ボストン鄧小平時代を前にして、依然として戒厳令下にあり、天安門事件という悲劇的な代価を支払ったにもかかわらず、政治も社会も安定せず、経済にも暗雲が立ちこめていて、江沢民体制の基盤もきわめて脆弱である。そのような中国であるにもかかわらず、ソ連は中改革をさらに進めようとしており、私自身も今回来たのだが、モスクワ―北京間のフライトはこのごろいつも満席である。

いずれ、中国にも東欧のような変動が生じるであろうし、そのときには中国も急激に変わるかもしれないが、当面は、一方で西側と交流しつつ、他方では中ソ関係、中朝関係、中蒙関係、中越関係を固めてアジア社会主義圏を死守しようとしている。

わが国は、このようなソ連、中国の行方を見つめながら、冷静な立場で北東アジア経済圏の活性化に資すべきであろう。この場合アメリカが、一方で大いに日本を叩きながら、他方では、ソ連、中国、北朝鮮そしてハトナムとも経済関係を強化しようと狙っていることも忘れてはなるまい。